



無限 MUGEN

2018 年 4 月 24 日



SUPER FORMULA レースレポート

2018 SUPER FORMULA シリーズ第 1 戦

山本、ポールトゥウインで開幕

福住は惜しくもリタイヤ

シリーズ名：2018 全日本スーパーフォーミュラ選手権 シリーズ第 1 戦

大会名：2018 NGK スパークプラグ鈴鹿 2&4 レース

距離：5.807km×51 周 (296.157km)

予選：4 月 21 日 (土) 晴れ・観衆：22,000 人 (主催者発表)

決勝：4 月 22 日 (日) 薄曇り・観衆：34,000 人 (主催者発表)

2018 年度全日本スーパーフォーミュラ選手権シリーズ第 1 戦が、三重県鈴鹿サーキットで開催された。TEAM MUGEN は、#15 福住仁嶺、#16 山本尚貴の 2 カー体制でこのレースへ参戦した。昨年 FIA-F3 選手権にデビューした福住は、国内トップフォーミュラでのレースは今回が初めて。今季もスーパーフォーミュラと並行して FIA-F2 選手権を戦う予定でいる。

● 4 月 21 日 (土)

■フリー走行

#16 山本 (ベストタイム 1 分 38 秒 371 2 番手)

#15 福住 (ベストタイム 1 分 38 秒 873 7 番手)

朝は一旦冷え込んだものの、雲が切れて日差しがコースを暖め始めた午前 10 時 15 分からフリー走行が 1 時間の予定で始まった。前日に設けられた練習走行セッションでは#16 山本は 15 周を走り 1 分 39 秒 446、#15 福住は 15 周を走って 1 分 39 秒 889 を記録、それぞれ 10 番手、14 番手につけた。どちらも土曜日以降の組み立てを重視した足慣らしであった。

フリー走行のためにコースがオープンすると、2 車はミディアムタイヤをつけてコースイン、順調に周回に入った。序盤のうちに 5 周を走った#16 山本は 1 分 39 秒 827 のトップタイム、#15 福住は 1 分 40 秒 651 で 4 番手につけるタイムを記録した。

セッション半ばでコースオフ車両回収のため赤旗が提示され全車ピットへ戻って走行は一旦中断となった。その後走行が再開されたが、今度は走行再開後 2 周目の#16 山本がデグナーカーブでコースオフ、セッションは再び赤旗中断となった。この時点で#16 のタイムは 1 番手、#15 福住のタイムは 4 番手だったが、残り 26 分で走行が再開されるとソフトタイヤを装着する車両が増し、タイムの更新が始まった。

残り 5 分となった段階で#15 福住、#16 山本はソフトタイヤへ交換、タイムアタックのシミュレーションに入った。その結果、#16 山本は 1 分 38 秒 371 を記録して一旦下がっていた順位を 2 番手へ上げ、#15 福住は 1 分 38 秒 873 を記録して 7 番手へつけてフリー走行セッションを終了した。

■公式予選

#16 山本 1 位 (Q1 : 2 位 1 分 37 秒 518 Q2 : 2 位 1 分 37 秒 227 Q3 : 1 位 1 分 36 秒 911)
#15 福住 2 位 (Q1 : 3 位 1 分 37 秒 559 Q2 : 3 位 1 分 37 秒 274 Q3 : 2 位 1 分 36 秒 991)

午後 3 時 45 分からの公式予選を前に鈴鹿サーキットは気温 23 度、路面温度 33 度と初夏を思わせる陽気となった。20 分間の Q1 セッションでは規則でミディアムタイヤの使用が義務づけられている。#16 山本はコースインすると快調なペースでタイヤを暖め、計測 2 周目にはトップタイムを記録、タイムアタックに入った 3 周目には 1 分 38 秒 347 でトップの座を固めるとピットへ戻った。#15 福住も順調にタイムを記録、#16 山本に続く 1 分 39 秒 159 を記録するとさらにもう 1 周アタックをかけてタイムを 1 分 39 秒 075 まで縮めた。

セッション前半を終え全車がピットへ戻った段階で#16 山本は 2 番手、#15 福住は 4 番手につけた。セッション残り 6 分 30 秒となったところで、2 回目のタイムアタックのため一斉にコースインが始まった。#16 山本は早々に 1 分 37 秒 518 を記録してトップに立った。その後このタイムを更新する車両が 1 台現れたが#16 山本は 2 番手で Q2 へ進出した。#15 福住は 1 分 37 秒 559 で#16 山本に続き 3 番手で Q1 を突破した。

10 分のインターバルを経て Q2 セッションが午後 4 時 15 分から 7 分間の予定で始まった。ここでは全車がソフトタイヤを装着、待機を経て残り 5 分となったところでコースインしタイヤのウォームアップを始めた。#16 山本はこのセッションでも早々に 1 分 37 秒 227 を記録して 2 番手、#15 福住は 1 分 37 秒 274 で 3 番手につけた。その直後コースオフした車両を回収するため赤旗が提示されセッションは中断された。

中断の後、残り 3 分でセッションは再開、多くの車両は 2 セット目のソフトタイヤを装着してタイムアタックにかかったが、2 番手の#16 山本と#15 福住はコースインしなかった。結局 2 人のタイムを上回る選手は現れず、そのまま 2 人は Q3 への進出を決めた。

午後 4 時 40 分から 7 分間の Q3 セッションが始まり、Q2 でコースオフした車両を除く 8 台が出走した。#16 山本と#15 福住は残り 3 分 30 秒となるまでコースインを遅らせ、後方からのタイムアタックを行った。2 台がウォームアップを行いタイムアタックに入ったところでセッション終了を示すチェッカーフラッグが振られ始め、#16 山本は 1 分 36 秒 911、#15 福住は 1 分 36 秒 991 を記録してコントロールラインを通過して、それぞれ公式予選 1 位、2 位となり TEAM MUGEN の 2 台がフロントローに並んで決勝レースを迎えることとなった。

● 4 月 22 日 (日)

■フリー走行

#16 山本 (ベストタイム 1 分 41 秒 316 8 番手)

#15 福住 (ベストタイム 1 分 41 秒 510 13 番手)

快晴の空の下、午前 8 時 35 分から 35 分間にわたってフリー走行が行われた。スタートからフィニッシュまで 300km と、通常よりも長い決勝レースに向けてレース戦略を最終的にまとめるため、ロングラン時のタイヤ状況を確かめるための周回が重ねられた。#15 福住は 17 周を走ってベストタイムは 1 分 41 秒 510 の 13 番手、#16 山本は 16 周を走ってベストタイムは 1 分 41 秒 316 の 8 番手であった。

■決勝

#16 山本 1 位 (51 周 1 時間 29 分 25 秒 365 ベストラップ 1 分 42 秒 678)

#15 福住 リタイア (32 周 ベストラップ 1 分 43 秒 011)

薄く雲はかかるものの、太陽が空気と路面を暖め、気温 26 度路面温度 40 度というコンディションで決勝レースが始まった。午後 1 時 54 分、スタート合図が下されるとフロントローの#16 山本、#15 福住ともうまく加速して 1-2 体制のまま第 1 コーナーに飛び込んだ。2 人ともミディアムタイヤを装着し、ソフトタイヤに交換するまでできるだけ周回数を増やして逃げ切る作戦だ。#16 山本は#15 福住をじりじり引き離しながら、オープニングラップのうちに 1 秒 5 強の差を

つけた。

後方では#15 福住が、2 ストップ作戦を選んで燃料搭載量を減らし身軽な#17 号車に追い上げられ、3 周目の第 1 コーナーで 3 番手へ順位を落とした。続けて#16 山本も#17 号車のアタックを受け 7 周目には 0 秒 340 差まで間隔を縮められたが踏みとどまり、8 周目以降は再び間隔を開き始めた。

#17 号車は 19 周目に 1 回目のピットストップを行ったため後退、#15 福住は再び 2 番手へ順位を上げ、15 秒 7 差で#16 山本を追いかける形の 1-2 体制となった。そのまま 30 周目まで TEAM MUGEN の 1-2 体制は続き、31 周を終えた段階でまず#15 福住がピットイン、給油とソフトタイヤへの交換を行った。

続けて、先行する#16 山本は 32 周を終えてピットへ向かい、給油とソフトタイヤへの交換を行ってコースへ復帰した。ところが先にピット作業を終えた#15 福住が 32 周目のヘアピン立ち上がりで突然スローダウン。#15 福住は順位を落としながら徐行状態でピットへ戻ったが、ギヤチェンジができないトラブルによりリタイアすることとなった。

#16 山本がピット作業を終えてコースに復帰すると、首位には先にソフトタイヤへ交換しペースを上げていた#17 号車だったが、2 ストップ作戦の#17 号車は 34 周目に 2 回目のピットインを行って順位を下げたため、#16 山本は再び首位に復帰した。

36 周を終えたとき、#16 山本の 11 秒 6 後方 2 番手には#19 号車が走っていた。#19 号車は TEAM MUGEN とは逆の、ソフトタイヤからミディアムタイヤへ交換する戦略を採り、レース終盤追い上げにかかった。ソフトタイヤを労りながらトップを走っていた#16 山本との間隔を少しずつ縮まり始めた。しかし#16 山本は安定したペースを守り 1 秒 720 差で 51 週のレースを走りきり、ポールトゥフィニッシュを飾った。#16 山本にとっては 2016 年開幕戦以来の優勝、TEAM MUGEN にとっては昨シーズン第 5 戦でのピエール・ガスリー以来の優勝であった。

■山本尚貴選手コメント

「開幕前テストではソフトタイヤをうまく使えなかったこともあって、公式予選でポールポジションを獲れると思っていませんでした。決勝では、戦略の違いもあって最後はかなり追い詰められたので、勝ち方としては心の底から喜べませんが、素直に嬉しく思います。スタート直後、#17 号車の塚越選手はきつとなにか戦略的に仕掛けてくるだろうとは予想していました。走り出して相手の燃料が軽いことがわかり、もし一旦前に行かせても負けることはないと思いました。でも、前を走られるとこちらのタイヤを傷めることにもなるのでそれは避けようと 1 コーナーで押さえたのが今回のレースのハイライトです。終盤追い上げられ、プッシュしようとしたらあまりタイヤが残っておらず余裕はありませんでした」

■福住仁嶺選手コメント

「フリー走行からの流れを考えると正直なところ公式予選で 2 番手にいけるとは考えていませんでした。決勝では、序盤（山本）尚貴さんに少しずつ離されていくとき、自分なりにプッシュしたかったんですがプッシュしてタイヤを傷めてしまってもイヤだなと思い、限界を探りながらタイヤを労って走って後半ペースを上げていくつもりでした。でもピットアウトしたらヘアピンの進入で急に何か起きて、アクセルを踏んでもアラームが出てゆっくり走るだけになってしまいました。せっかくそこまで頑張ってきたのにと悔しかったです。今日はポディウムの可能性も十分にあったし、ポイントを獲得して TEAM MUGEN のチームチャンピオン獲得に貢献できたかも知れないのに、もったいないレースになってしまいました。でも今日のぼくでは尚貴さんに勝てなかったと思います」

■手塚長孝監督コメント

「16 号車が優勝できて嬉しいです。山本選手がとにかく頑張りました。15 号車のトラブルはとても残念でした。福住選手には申し訳ないです。チーム全体の評価としては、厳しいですが点数で言うと 50 点。練習走行ではコンディションが悪い中、しっかりと落ち着いてセットアップが出来ました。実際大きな変更もなく予選に臨むことが出来ました。予選では必ず Q3 に行ける確信していましたが、1-2 を取れるとは、感動しました。福住選手はルーキーとは思えない走り、そして洞察力で大いにチームに貢献しました。#16 と #15 の共有化が良い方向に働いたと思います。決勝は 1-2 スタートでしたので、ギャンブルは出来ませんでした。また、レース距離が 300km で、山本選手はトップ死守のプレッシャーもあり、過酷な心境に苛まれていたようです。優勝できてホッとしています。応援してくださるスポンサー様、ファンの皆様、関係協力会社様に喜んで頂けたかと思うと、やはりホッとしております。改めて、ありがとうございます。そして、次戦こそが本番です。チーム全員気を抜くわけにはいきません。皆様の応援が何よりの力になります」

TEAM MUGEN スーパーフォーミュラサイト

<http://www.mugen-power.com/motorsports/sf2018/>

無限フェイスブック

<https://www.facebook.com/mugen1973/>





